

カ
エ
ル

岡
本
卓
也

人物

柏原雪 (30) 銀行受付

柏原謙也 (16) 高校生

滝口修 (40) 国語教師

柏原崇 (57) 会社役員

柏原妙子 (93) 雪子の祖母

○波路荘外觀

波路荘の看板のかかった高級料亭。生垣の内側の座敷の一室で数名の大人が向かい合い見合いが行なわれている。

○同中喫煙室

高校の制服ズボンに白い半袖のワイシヤツ姿の柏原謙也（16）がタバコを吸っている。ドアを開け中に入っていくる柏原雪（30）。雪は長い少しカールのかかった黒髪に薄緑の上品なワンピース姿で茶系のヒールを履いている雪「一本ちょうだい」

謙也の手からタバコを受け取り、一本取り出し口にくわえ謙也を見つめる雪。めんどくさそうに火をつける謙也。一息吸って大きくむせる雪。

謙也「無理して吸うなッ」

苦い表情の雪。

謙也「相手に見られたら、印象悪いだろ」

雪子「そうね」

突然ドアを叩く音がし振り返る二人。
ドア向こうにスーツ姿の柏原崇（57
）が二人を見つめている。俯きタバコ
を灰皿に捨てる二人。

○柏原家外観（夜）

真ん中に二階建ての大きく立派な日本
屋敷が一つ、両側には蔵と小さい屋敷
も見える。

○同中居間（夜）

大きな居間のテーブルに腰かけている
雪、謙也、崇。白髪に小柄で猫背の柏
原妙子（93）も側に腰掛けている。

妙子「どうやった？」

雪「うん、」

暫く沈黙。

謙也「さすがにあんな年寄りるところ嫁に行き
たくはないわなあ」

崇 「年寄りつて、まだ四十三だったろ」

謙也 「でも六十くらいに見えたよ、俺」

崇 「まあ確かに」

謙也 「あれだと嫁いだ先から介護が始まりそ

うで、ねえちゃん可哀想だわ」

思わず吹き出す雪子。虚ろな顔で妙子

妙子 「この歳になつて、ひ孫の一人も見れん

へんなんてなあ、悲しいわ」

そうぼそつと言つて出て行く妙子。ゆ

っくり立ち上がり窓を開ける雪。遠く

の水田から蛙の鳴き声が聞こえてくる

○同台所（朝）

台所で弁当を作っている雪。ワイシヤ

ツに学生ズボン姿の謙也がやってくる

。弁当を謙也に渡す雪。

雪 「今週末模試でしょ？」

謙也 「うん」

雪 「もう希望大学に東大とか、冗談でも書く

のはやめなさいよ」

謙也「うん」

雪「でも、本当に東京じゃないと駄目？もうちよつと近くの大学でいいじゃない」

謙也「もう決めたって言ったろ」

雪「そうね」

弁当箱をカバンに入れ出て行く謙也。

側の麦茶を手に取り一口飲む雪。

○北都信用銀行外観

3階建てのビル。自動扉が開き、老夫婦が中から出てくる。

○同中休憩室

銀行の制服姿の雪と芦田茉莉子（32）が弁当を食べながら話している。

茉莉子「何がダメだったの」

雪「うん、」

茉莉子「都会の三十歳じゃないの、田舎の三十歳なのよあんたはもう。そんでもってあ

んたんとこの家柄に釣り合うそこそこの家

から男を探すつて大変なんだから」

雪 「うん」

茉莉子 「こんな田舎で、家柄も良くそこそこ
お金持ちでまだ余っている独身男つて言つ
たら、見た目によつぽど問題あるか、それ
かバツイチか、だいたいどつちかなの」

雪 「そうか、そうね、」

手に持った箸をじつと見つめる雪。

雪 「そうね」

卵焼きを口に入れゆつくり噛む雪。

○学校教室中

机でだるそうにうつ伏せで寝ている謙

也。教壇には滝口修（40）が女生徒

たちに囲まれ楽しそうに話している。

滝口は細い目つきに黒縁メガネ、スー

ツにネクタイを締め、口ひげを生やし

ている。男前ではないが清潔感はある

印象。女生徒たちの楽しそうな声にイ

ラつとし体を起こす謙也。気だるい表

情で滝口を見つめる。

○学校校門（夕）

雨が降っている。門のところで傘を持ち下校する生徒たちを滝口が見送っている。生徒達がいなくなり一人謙也が門に向かって歩いてくる。滝口を無視するように門を出て行こうとする謙也。すれ違い様に滝口、

滝口「さようなら」

何も言わず門を出て、道を左に折れ歩き去る謙也。暫くすると、右の方から会社帰りの雪が傘をさし自転車を引きながらやってくる。ふと目が合う雪と滝口。目をそらしまた歩き出す雪。雪に近づく滝口。

○小道（夕）

夕立の中自転車を引き歩く雪。その横に並んで歩く滝口。突然立ちどまり滝

口を見つめ何か言う雪。気まづそうな表情でそれを聞く滝口。黙って暫く立ち尽くす二人。虚ろな表情でまた歩き出す雪。立ち止まったまま雪の後ろ姿を見つめ、振り返り逆側に歩き去っていく滝口。道を右に曲がる雪。前方に謙也が立っている。立ち止まる雪。

○謙也の部屋（夕）

ベットに腰掛ける謙也。向かいに膝を横に崩し雪が畳の上に座っている。

謙也「やっぱり付き合ってるの、滝口と？」
黙っている雪。

謙也「どうなんだよ、はつきり言えよ」
しばらくの沈黙。雪が口を開く。

雪「もし、仮に」
謙也「うん」

雪「私が滝口先生と付き合ってたとして」
黙っている謙也。

雪「私が先生のとこに嫁に行くか、あのおじ

いさんみたいな人んとこに嫁に行くか、あ
んたどつちがいい？」

謙也「おじいさんとこ」

謙也を見つめ雪、

雪「あんなおじいさんのところに嫁いだら、
姉ちゃんが可哀想つてあんた言ったよね」

謙也「いいだろ。どうせすぐ死ぬつて。そん
で遺産もらつて」

雪「そんじゃ、私、すぐ未亡人？」

頷く謙也。

雪「じゃまた結婚する人探さないといけない
じゃない。貰い手ないでしょその頃には」

謙也「あるよ」

雪「誰？」

謙也「別のおじいさん」

足をさすり考え込む雪。

雪「なんでおじいさんばっかり、」

雪に背を向けベットに潜り込む謙也。

雪「何がそんなに嫌？」

謙也「気持ち悪いんだよ」

足をさすりながら雪、
雪「私があの人に抱かれるのが？」

黙っている謙也。

雪「もう抱かれてるよ」

しばらくの沈黙。

謙也「聞いてないし」

雪「嘘よ」

謙也「何だよ、どっちだよ」

答えずじつと考え込む雪。空いた部屋

のドアの前の廊下に突如妙子が現れる

妙子「何でこんな歳になっても、ひ孫の一人

も見られんのやろ」

そう言っつてゆつくり歩き去つていく妙

子。足をさする手を止め考え込む雪。

○学校教室中（朝）

机でだるそうに眠っている謙也。後ろ

の席の男子生徒△が謙也の背中をさす

る。体を起こす謙也。

生徒△「おい、聞いたか。滝口のやつ、三組

の赤木と結婚するらしいぞ」

戸惑った表情で生徒△を見る謙也。

生徒△「俺赤木先生まじでタイプだったんだ
けどな。ムカつくな、滝口のやつ」

薄ら笑いを浮かべる謙也。

○柏原家二階和室（夕）

窓際で昼に足を崩して座り外を眺めて
いる雪。外は天気雨。妙子が部屋に入
ってきて立ったまま雪の隣で窓の外を
一緒に眺める。外を見つめながら雪、
雪「おばあちゃん、私、ずっとこのままこの
家にいちゃダメ？」

窓の外を見ながら妙子、

妙子「おばあちゃんが三十歳の時には、もう
三人目産んどったなあ」

天気雨をぼーっと見つめたまま雪、
雪「そう」

部屋を出て行く妙子。足をさすり窓の
外の雨をじっと見つめ続ける雪。